

世界遺産とコミュニティに関する一考察

——富岡製糸場を事例として

日本大学商学部専任講師
千葉大学法政経学部非常勤講師
木下 征彦

1. はじめに

この小論では、群馬県富岡市における世界遺産・富岡製糸場を中心としたまちづくりを事例として、世界遺産とコミュニティの関係を検討しつつ、データ分析に向けた準備を行う。

2014（平成26）年6月、同市にある富岡製糸場はその顕著な普遍的価値が認められ、「富岡製糸場と絹産業遺産群」として国内18番目のユネスコ世界遺産に登録された。このことは富岡市の知名度を一躍全国区に高めるとともに、地域に大きな変化をもたらした。

「富岡製糸場を核としたまちづくり」を掲げる岩井賢太郎市長の下、富岡製糸場は「コミュニティの中心」として位置づけられ、富岡市は「世界遺産にふさわしいまち とみおか」に向けた取り組みを本格化させた。富岡製糸場は市民のシンボルとして、コミュニティの共同性の紐帯となることが期待されている。

実際、富岡市の歴史・文化と富岡製糸場を切り離して考えることは難しい。富岡製糸場は明治政府の「殖産興業」と共に歴史の教科書に記述されており、その知名度は全国的なものである。富岡市のふるさと学習でも地域の養蚕・製糸産業の代表として必ず取り上げられており、その意味でも製糸場は富岡市のシンボルであり、全ての市民が共有する歴史である。

しかし、コミュニティの原義に立ち返り、共同性と地域性という観点からみると、これを行政区分としての富岡市の広い市域におけるコミュニティの紐帯とみなすことには慎重を期す必要がある。というのも、1872（明治5）年に官

営模範工場として開業した富岡製糸場は 1893（明治 26）年に民間に払下げられて以降、地域の一角で民間工場として 1987（昭和 62）年まで操業を続けてきた。それは周辺地域の人々にとっては日常の一風景として溶け込んでいた。とはいえ、その全期間を通じて製糸場は公的あるいは私的な閉鎖空間であり、けっして住民の共同の場ではなく、あるいは開かれた公共の場でもなかった。製糸場が市民に開かれた場となったのは、世界遺産登録推進運動の開始後の 2005（平成 17）年のことである。

つまり、富岡市というコミュニティとの関係を考えた場合、富岡製糸場はかならずしも愛着や帰属の対象として認識される共同性の紐帯とはならず、「コミュニティの中心」としての場所になりえるものではないと考えられる。をあえてコミュニタリアニズム的に表現するならば、富岡市というコミュニティにおいては、富岡製糸場の価値はメンバーに共有され、そのアイデンティティに埋め込まれているものではないといえよう。

ところで、政治哲学における規範理論としてのリベラリズムとコミュニタリアニズムの重要な論点の 1 つは、M. サンドルが取り上げた「負荷」をめぐる議論である（Sandel, 1982[1998]=2009）。J. ロールズの『正義論』を批判したサンドルは、リベラリズムの想定する原子論的な人間像を「負荷なき自己」として問題視する。その批判の要諦は、財の再分配を認める「格差原理」やその前提である「共有資産」の概念に含まれる全体性を説明できないという論理的な不整合を指摘した点にある¹。サンドルによれば、「共通」や「私たち」という全体論的な考え方を導くためには、コミュニティの構想が欠かせない。現実に存在する人間はそれぞれが具体的なコミュニティに属している「負荷ありき自己」であり、そこに対する責務を負っているとされる。

サンドルに限らず、コミュニタリアニズムと呼ばれる理論的立場は他者の存在を前提とする間主観的な人間観にもとづき、コミュニティが個人の自己形成や帰属に根源的に関わることを念頭に置く。したがって、コミュニタリアニズ

¹ この点については、小林（2013）により詳しい。

ムの理論において重要な概念となる共通善や美徳という観念も、コミュニティとそれを構成する人びとの内面と分かちがたく結びついている。ただし、それらはすでにある伝統に束縛されるだけのものではない。善や美徳はコミュニティにおける人びとのあり方やそこでの対話によって省察され、修正されていく。その意味で、コミュニタリアニズムが論ずる個人とコミュニティの関係は双方向的なものであり、けっして全体が個を抑圧するという一方的なものではない。

また、コミュニタリアニズムは自由で自律した個人がコミュニティとの関係を前提として連帯と帰属にもとづく責務を引き受けつつ、コミュニティに参加するものとする。例えば、サンデルにとってコミュニティは帰属意識や道徳的な絆をもたらし、よりよい共通善を育む人格形成的な政治に参加する場である。まちづくりやコミュニティ形成という文脈で考えると、人びとが自分の属する地域において他者と共により良いコミュニティめざす道筋を示すコミュニタリアニズムの人間観・社会観は、ある種、魅力的である。

しかしながら、コミュニタリアニズムの理論にはいくつかの課題も残されている。例えば、小林（2013）と木下（2013）が着手したコミュニティ概念の無規定性の問題は今なお残る。また、コミュニティが個人の自己形成や帰属にどのような具体的作用を及ぼすのか。あるいは共通善や美徳はどのように形成されるのか。これらは実証的な裏付けをもって論じられていない。

高度に抽象化されたコミュニタリアニズムの理論を現実の分析や政策プログラムに応用することは現状で困難であるが、そこに示されている個人とコミュニティの関係は、現実の地域社会の分析やコミュニティ形成のプログラムを論ずる上で示唆的である。

そこで本稿では、コミュニタリアニズム的なアプローチから世界遺産・富岡製糸場と富岡市におけるコミュニティとの関係の分析に向けた記述・整理を行う。そのために、コミュニタリアニズムの理論と社会学的な実証研究の接点についての予備的な検討を行う。

2. 世界遺産・富岡製糸場とコミュニティ

ここでは本稿で事例として取り上げる富岡市および富岡製糸場とその世界遺産登録の影響について記述・整理する。

2-1 事例地域の概要

富岡市の概要

富岡市は群馬県南西部に位置する小都市である。町のおこりは江戸幕府の代官・中野七蔵が物資の中継地として新町の開発に着手した1612（慶長17）年にさかのぼる。当初は天領として拓かれたが、後には旗本知行地となり明治維新を迎えた。政府の殖産興業政策の一環として計画された官営模範工場の建設地に選定され、1872（明治5）年に官営富岡製糸場が操業を開始した。

官営工場設立をきっかけに町は発展し、富岡製糸場や組合製糸・甘楽社の工場などを中心に製糸・養蚕業が栄えた。明治の町村制施行によって富岡町が誕生。1954（昭和29）年には周辺町村との合併によって富岡市が誕生した。その後、2006（平成18）年に妙義町と合併した新富岡市が発足し、現在の市域が確定した。

富岡製糸場をきっかけに発展したとはいえ、富岡は製糸場を中心とした企業城下町ではなかった。江戸期から現在に至るまで、富岡は群馬県西部の富岡市・甘楽郡地域の商業・文化の中心地として人々の交わる場であった。

しかしながら、全国の地方都市の例にもれず、20世紀半ば以降の繊維産業の衰退やモータリゼーションの加速は、高崎などの大都市への人口や購買力の流出をうながし、富岡の商圈規模や影響力は縮小した。郊外の人口増加や自動車利用の増加にともなうライフスタイルの変化は、バイパス沿いの郊外型大規模店舗に賑わいをもたらす一方で中心市街地の商店街は衰退を余儀なくされた。

人口は1995（平成7）年に過去最高の54,435人に達した後に減少へと転じ、2015（平成27）年には5万人を下回る49,746人となった。また、高齢化率は30%に達している。産業別就業割合をみると第3次産業が52.5%、第2次産業

が39.6%、第1次産業が7.2%である²。また、2012(平成24)年度の産業全体の売り上げ252,433百万円の内、製造業が127,926百万円と5割を占めている³。中心市街地にはシャッターを下ろした商店や空き家が増え、行政は危機感を募らせている。

富岡製糸場

明治期に官営模範工場として設立された富岡製糸場は、フランス人技師ポール・ブリュナの指導の下、高い品質の生糸を製造するための器械技術を習得するための模範工場であった。模範工場としての役目を終えて1893(明治26)年に三井家に払い下げられた後、原合資会社による経営を経て最終的には「片倉工業株式会社富岡工場」として1987(昭和62)年まで操業を続けた。和洋折衷建築である繰糸所や東西の置繭所(倉庫)をはじめ建設当初の建物が約100年以上にわたって、ほぼそのまま使われた。これらは当時の最先端の建物で、建築史的にも高い価値を持つものとされる。

操業停止後も歴史的価値のある建物を「売らない、貸さない、壊さない」の3原則を掲げた片倉工業が社会貢献として18年間に渡って施設の維持管理を続けたことで、現在も敷地内には明治・大正・昭和期の貴重な建物が多数現存している。

また、官営期の富岡製糸場は「工女」として全国から若い女性が集められたことで知られているが、民営化後も工場の働き手の多くは女性であった。地元富岡市以外の地域から働きに来た若い女性が富岡市で伴侶を見つけ、そのまま居着いたケースも少なくなかったという⁴。敷地内には官営期から働く女性たちが生活する宿舎が建てられており、原・片倉時代の女子寮が今も残る。また、現存する社宅以外に長屋形式の社宅があり、社員とその家族の生活の舞台でも

² 平成27年国勢調査より。

³ 総務省・経済産業省「平成24年経済センサス-活動調査」を再編加工したRESAS地域経済システムデータより。当年度の就業者総数は25,078人。

⁴ 元片倉工業従業員聞き取り調査(2014年9月実施)より。

あった。富岡製糸場のロケーションは中心市街地のさらに中心の「富岡1番地」であり、周辺は商店街と住宅地に囲まれている。現在、敷地はブロック塀で区切られているが、昭和の片倉時代はカラタチの垣根や水路で隔てられていた。製糸場の敷地内は民間工場であったが、社宅に住む社員の家族との交流等の形で住民の出入りもあったという。こうした生活空間の中にあった富岡製糸場は、地域の住民たちから親しみを込めて「カタクラ」と呼ばれていた⁵。

明治以降、製糸場周辺には数多くの商店や飲食店が集まり、芝居小屋が立つなどの賑わいをみせた。製糸場の正門へと続く「城町通り」では最盛期には3軒の旅館が営業し、通りの裏側には花柳界が広がっていた⁶。また、付近の繁華街だった銀座通りにはダンスホールや複数の映画館が軒を連ねていたことから、当時の繁栄の様子がうかがえる。

世界文化遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」

2003（平成15）年から群馬県が中心となって世界遺産登録推進運動が開始された。官民のさまざまな努力が奏功し、2007（平成19）年に文化庁の世界遺産登録暫定リストへの記載が実現した。2005（平成17）年9月には富岡製糸場は片倉工業から富岡市に寄贈され、同年7月には国の史跡に、2006（平成18）年には主な建造物が国の重要文化財の指定を受けた。そして、2014（平成26）年6月には「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産として、高山社跡（藤岡市）、田島弥平旧宅（伊勢崎市）、荒船風穴（下仁田町）と共にユネスコ世界文化遺産に登録されるに至った。

その「顕著な普遍的価値」は、ユネスコ世界遺産委員会が公表した登録基準Ⅱの選定理由から端的に知ることができる。

富岡製糸場は、産業としての養蚕技術をフランスから日本に、早い時期に、完全に移転することに成功したことを示している。地元での長年の養蚕の

⁵ 銀座通り商店街商店主聞き取り調査（2018年2月実施）より。

⁶ 地域住民聞き取り調査（2014年9月実施）より。

伝統を背景として行われたこの技術移転は、養蚕の伝統自体を抜本的に刷新した。この結果富岡は、技術改良の拠点となり、20世紀初頭の世界の生糸市場における日本の役割を証するモデルとなった。このことは、世界的に共有される養蚕法が、早い時期に現れたことの証拠となった⁷。

これらの影響によって富岡製糸場の知名度は全国区となり、富岡市を訪れる観光客の急増につながった。さらに、2014（平成26）年12月には富岡製糸場の繰糸所、東置繭所、西置繭所が国宝に指定された。

2-2 世界遺産登録の影響

行政施策の変化

世界遺産登録推進運動の開始以来、富岡市にはいくつかの変化がもたらされた。2006（平成18）年には「富岡市まちづくり計画」が策定され、富岡製糸場の世界遺産登録を見据えた緩衝地帯（バッファゾーン）の考え方が示された。また、「地域文化の創造と発信による知的観光のまちづくり」が盛り込まれ、製糸場と養蚕に関連する物語性のある周遊観光コースによる地域の魅力に努めることなども記載された。それまで「点」であった地域の資源が物語によって「線」や「面」としてつながりはじめたことの意義は大きい。

その後、2008（平成20）年には「第1次総合計画」の基本理念の1つに「富岡製糸場を中心とした元気なまちづくり」が記載されたことをはじめ、富岡製糸場の世界遺産登録を見据えた「景観計画」、「都市計画マスタープラン」、「観光戦略」などが策定された。また、2012（平成24）年には一般市民からの愛称公募により富岡市のイメージキャラクターに「お富ちゃん」の愛称が付けられた。このキャラクターは官営期の富岡製糸場で働いていた工女をモチーフとし、地域内外に製糸場の物語を伝達・共有して地域の魅力をPRするために生み出された。これに対応して2013（平成25）年にはまちなか観光物産館「お富ちゃ

⁷ 2014年6月21日文化庁報道発表資料より。

ん家」が設置され、観光案内が始まった。これらのことから世界遺産登録に向けてハード・ソフトの両面でそれまでにない変化が生じていたことがわかる。

世界遺産登録後の2016（平成28）年にまとめられた「第2次総合計画」では、めざす将来像として「世界遺産にふさわしいまち とみおか」が掲げられた。このことは前述の通り、富岡製糸場が施策上の「コミュニティの中心」として位置づけられたことを意味している。同時期に策定された「富岡市総合戦略」と合わせて富岡市は観光まちづくりへの取り組みを本格化する。

市民意識の変化

世界遺産登録推進運動は群馬県を中心に進められたが、それに呼応した市民団体の活動や市民の意識の変化も重要である。例えばNPO法人「富岡製糸場を愛する会」や「富岡製糸場解説員の会」「富岡製糸場伝道師協会」などのアソシエーションには地域の内外から人が集い、交わり、活動を推進した。118年間の操業期間中は地域に対して閉じられていた製糸場は、物理的な意味でも地域に開かれはじめ、世界遺産登録推進運動としての活動の舞台となった。

また、市民の富岡製糸場の認知も登録推進運動を経て向上している。具体的には、表1に示すように、登録前2005（平成17）年に群馬大学が行った調査（森谷、2005）と、登録後の2014（平成26）年に高崎商科大学が実施した調査（木下編、2016）の単純集計を比較すると、9年間の間に「内部まで見学したことがある」が22.1ポイント増加していることがわかる（木下編、2016 34）。

このことは市民の大部分が、ふるさと学習などを通じた共通の歴史的知識に加え、製糸場見学という経験を共有するに至ったことを示している。とはいうものの、逆にいえば2014（平成26）年の時点でもなお、3割の市民が製糸場を共通の経験としていない現実が残されている。

観光まちづくりの展開

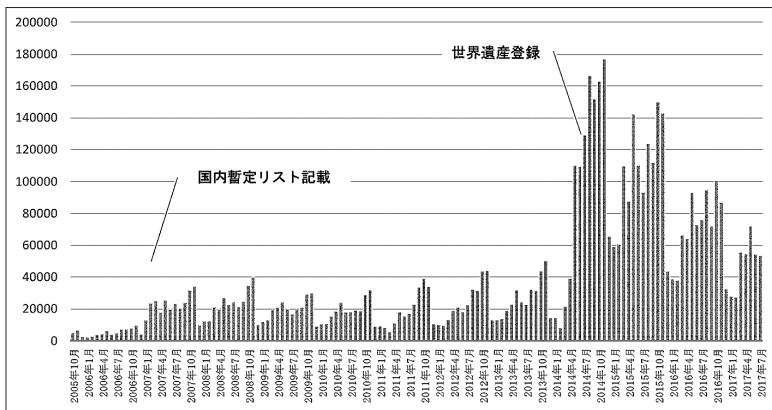
富岡製糸場の入場者数は富岡市に管理が移管した2005（平成17）年以来増加を続けていたが、世界遺産登録を経て急増した。登録前2013（平成25）年

表1 製糸場見学の経験

群馬大学調査 (2005年)	n=758	高崎商科大学調査 (2014年)	n=936
内部まで見学したことがある	47.0%	内部まで見学したことがある	68.1%
内部には入らなかったが、 外観を見学したことがある	34.0%	内部には入らなかったが、 外観を見学したことがある	18.2%
通りすがりに見た程度である	15.0%	通りすがりに見た程度である	8.5%
知っているが、見たことはない	4.0%	知っているが、見たことはない	4.0%
知らなかった	0.0%	知らなかった	0.1%

(出典 森谷、2006・木下編、2016より筆者作成)

図1 富岡製糸場入場者数の推移 (月別)



(出典 富岡市資料より筆者作成)

度の314,516人から、登録された2014(平成26)年度は1,337,720人と4倍以上となった(図1)。

それまで閑散としてシャッターが目立っていた製糸場周辺の通りはにわかに活気づき、登録後半年ほどの間は主に地域の外からの資本による新たな飲食店や土産物店の出店ラッシュが続いた。しかしながら、他の世界遺産登録地域の事例と同様に一時的な喧噪から次第に落ち着きを取り戻し、製糸場の入場者数は2015年度には1,114,706名、2016年度は800,230名と減少の傾向にある。

世界遺産登録後の急激な地域の変化の中で、富岡市役所は前述のとおり「富岡製糸場を核とした日本一のまちづくり」のかけ声のもと、改革を進めた。とりわけ、世界遺産登録1年目の観光の急増は大きな衝撃を与え、それまで観光地ではなかった富岡市において、はじめて観光とまちづくりが共通の土台で考えられるようになった（木下、2016）。

2016（平成28）年の「第2次総合計画」では「世界遺産にふさわしいまち富岡」を掲げ、製糸場の計画的な保存・整備、製糸場を活用した観光プロモーションの強化による「交流人口の増加」を計画した。それまで観光地であったことも、あろうとしたこともなかった富岡市において、富岡製糸場はあたかも「外部への窓」として富岡市という「コミュニティの中心」とみなされるようになったのである⁸。その意味で、「コミュニティの中心」としての富岡製糸場は、内発的な発展ではなく外部からの評価とまなざしによってもたらされたものである点を見逃すことはできない。

3. コミュニティを捉える視点

ここでは本稿の主題である「世界遺産とコミュニティ」を論ずる視座を獲得するための準備として、コミュニティの概念の本質を理論的に検討する。コミュニティアリズムに接続可能な社会学的なコミュニティ概念としてR. M. マッキーヴァーの理論を取り上げる。

3-1 マッキーヴァー理論にみる個人と社会

R. M. マッキーヴァーの『コミュニティ』

冒頭に述べたコミュニティアリズムの論ずる個人とコミュニティの関係は、近代の社会科学がもっとも重要な主題とする個人と社会の関係の1つの規範的なモデルである。中でも社会学の学問的な特徴は「社会」および「集団」を人と人の「関係」として捉えることにある。このことは近代になって登場した啓

⁸ 広井（2010 24-30）

蒙思想や自由主義、それらにもとづく人間関係と社会の動的な変容と密接に関わっている。黎明期の社会学における方法論的個人主義と方法論的集合主義の対立以来、要素としての個人と全体としての社会の関係性を論ずることは社会学理論の主題といってもよい。

社会学理論の2つの主要な系譜である意味論と社会システム論はよく知られているが、それ以前に英語圏における *community* を社会的な概念として確立・提示した R. M. マッキーヴァーの『コミュニティ』(MacIver, 1917 1924 = 2009) が、個人と社会の関係および発達を包括的に論じた理論書であることは、近年ではほとんど言及されない。

マッキーヴァーのコミュニティ概念は、しばしば共同性と地域性を特徴とするマクロな集団類型としてイメージされがちである。しかし、初期の主要業績である『コミュニティ』における彼は、「社会を個人の総和以上」とみなす E. デュルケムらの方法論的集合主義のアプローチを批判し、個人の内面的・主観的な「意志」とその対象である「関心」から社会の構造と機能を論じるアプローチを示す。

ここで社会の基盤として論じられるコミュニティは実体ではなく、個々人の内面における心的な相互作用とみなされる、いわば共同態である。コミュニティが人間の内面的な主観によって形成されているという洞察は、今日に至るコミュニティ概念の混乱を考える上で非常に重要であり、実証研究においてコミュニティを把握するための視点がすでに提示されている。

コミュニティの構造

マッキーヴァーによれば、コミュニティは共同関心にもとづき「たえず相互に関係し合う人びとの心の活動によって創られる」ものである(前掲書、123)。同書で論じられるコミュニティ概念は、人びとの共同関心にもとづく包括的な基盤であり、分立的な関心を実現する組織であるアソシエーション概念と相補的な関係にある。アソシエーションは社会の分化に応じて生ずるさまざまな関心を充足させることを目的に群立する。異なるアソシエーション同士の間には

時に対立も生ずるが、共通基盤としてのコミュニティがそれらを調整、統合する機能を担う。

このモデルは、多様なアクターが参加する現代のまちづくりを考える上で非常に示唆的である。例えるならば、ある特定の地域に住む人びとが、その内面に抱く自分たちが生活する舞台である「まち」や「地域」という共通の感覚や感情がコミュニティであり、育児、教育、福祉、環境保全などの個別の関心にもとづく組織がアソシエーションである。組織と組織の間に対立が生じたとしても、メンバーが共通の基盤としてのコミュニティの上に立つならば、それは調整可能とされ、むしろアソシエーションの活動や交流がコミュニティの発達につながる。

マッキーヴァーは『コミュニティ』において、全体であり基盤となるコミュニティと、その内部で個別的な目的を掲げる部分組織であるアソシエーションの2つの概念を相補的に用いることで、社会全体の統合および発達のメカニズムを統一的に論じることに成功したのである。

コミュニティとパーソナリティ

前述のとおり、マッキーヴァー理論の方法論的特徴の1つは個人がその内面に抱く関心へのアプローチという点にある。とはいえ、彼は社会に対する個人の優位を一方的に示したわけではない。

まず、コミュニティとは共同生活の領域であり、その地域性として「ある種のまたある程度の独自の共通の諸特徴——風習、伝統、言葉遣いそのほか——が発達する」ことを認める（前掲書、46）。なお、マッキーヴァーのコミュニティ概念を特徴づける地域性とは、一定の領域上での共同生活を意味するが、元来は生態的な地域社会を指すだけのものではなく、個々人に先立つ意思以前のな与件という含意を見いだせるものである。いわばマッキーヴァーの理論は、サンデルらのいう「負荷ありき」個人を前提としており、コミュニティはそうした個人が他の個人との心的な相互作用を通じて互いに影響し合い、その個性と社会性を発達させるのである。

ゆえに、「社会的個人でないような個人は存在しないし、社会は個々人の結合や組織以上のものではない」という一文は、マッキーヴァーの個人観・社会観を端的に示しているといえる（前掲書、93）。彼によれば、個人のパーソナリティは「個性と社会性の要素からなる統一体」であり、その個性化と社会化は「〈相並んで〉」発達する。そして、「われわれの個性は、もしも強ければ、その社会を強化するように—もしも弱ければ、弱体化させるように—作用する。そして逆に、われわれは個性の程度を社会に負っている」（前掲書、245）と論じ、個人と社会の双方向的な関係を認めている。

ところで、『コミュニティ』第3部では、ある種の規範的なコミュニティが念頭に置かれ、その実現に向けたコミュニティの発達法則が検討される。そこで個人と社会の関係は相補的に捉えられ、「人間の発達と人間相互関係の発達は単一の研究領域を形成する」（前掲書、445）とみなされる。すなわち、統一された法則の2つの側面として個人のパーソナリティとコミュニティの発達が社会関係や社会構造、コミュニティの慣習・制度、そしてアソシエーションを変えるという、一種のシステム論に結実する。

3-2 コミュニティの実証研究に向けて

『コミュニティ』の意義と限界

マッキーヴァーの『コミュニティ』はすでに1世紀前の理論であり、現代の理論的水準からみると課題も少なくない。実際、同書はサンデルのというような自己形成や帰属を直接的に論じておらず、M. ヴェーバーの「エートス」のような内面的価値を説明する概念もない。また、意味論やシステム論の理論と比べれば、その精緻化の具合は及ぶべくもない。

それでもなお、『コミュニティ』の本質に迫った本書の問題意識や基本的視点は今なお有効であるといえる。とりわけ、コミュニティを諸個人の内面的な共通の関心に基づくものとして捉える視点は、実証主義的な社会学よりもむしろ政治哲学的、社会哲学的である。そして、そこで彼が目指した規範的な社会の姿は個人の自由と社会の秩序の調和にほかならない。この点は社会の統合を描

く有効な理論をもたない現代のコミュニタリアニズムが新たな理論的な展望を拓ききっかけになりえる。

そして個人とコミュニティ、さらにはコミュニティとアソシエーションの関係を相補的に捉える視点は、社会の統一的な法則を理論化しようとした包括理論ならではのものといえる。コミュニティの概念が実体化・道具化し、さまざまな研究アプローチが登場して議論の共通基盤を失いつつある中で、常に立ち戻るべきコミュニティの本質である。

地域性とコミュニティ感情

マッキーヴァー自身は後期の著作『社会』(MacIver and Page, 1959)においてコミュニティ概念をより実証的・道具的なものとして提示している(MacIver and Page 1950)。「地域性(locality)」と「コミュニティ感情(community sentiment)」によって特徴づけられる後期のコミュニティ概念は、実体として生態的に捉えられる「共同生活の領域(area of common living)」である。とはいえ、その形成の契機を「コミュニティ感情」という個人の内面的・主観的な意識に求めるマッキーヴァーの理論的立場は『コミュニティ』から一貫している。

ここでいう「地域性」は、一定の境界をもつ地理的空間上を指す。そこで共同生活を送る人々の内面にある「コミュニティ感情」は、「われわれ感情(we-feeling)」、「役割感情(role-feeling)」、「依存感情(dependency-feeling)」の3つの要素からなる。

これらをより具体的に捉えるならば、「われわれ感情」はコミュニティの一員として参加することで得られる一体感であり、コミュニティへの愛着や帰属感とみることができる。「役割感情」は、コミュニティにおける自己の相対的な立ち位置と果たすべき役割をもつという感情といえる。これはコミュニティへの関与をあらわす。そして「依存感情」は、基盤としてのコミュニティにおける他者への依存感情である。人間はコミュニティにおいて他者との関係を前提にしており、それと切り離されては存在し得ない。その意味で、個人のパーソナ

リティの形成は他者の存在に依存せざるを得ない。この要素は、コミュニタリアニズムが重視するコミュニティと個人のアイデンティティにおける不可分の関係を捉えたものであるといえよう。この点からもマッキーヴァーの理論枠組みおよびコミュニティを捉える道具立てが、現代のコミュニタリアニズムに寄与する余地があることがわかる。

「コミュニティ意識」へのアプローチ

社会学におけるコミュニティの概念は、主に産業化・都市化によって変容する地域社会の状態を分析するための概念として用いられてきた。多岐にわたるコミュニティ論であるが、金子勇はコミュニティをめぐる学説を「社会システム」「共存関係」「共生関係」「地域空間」「習慣と慣習の体系」の5つに分類しつつ、都市社会学におけるコミュニティへの問題関心を整理している(金子、2011 39-40)。そこで示される「社会集団としてのコミュニティ」やR. L. ウォレン(Warren, 1972)にはじまる「社会システムとしてのコミュニティ」は社会学ならではのアプローチであるといえる。

一方、マッキーヴァーにみたように、コミュニティを個人の意識から捉えるという発想は、日本の都市社会学のコミュニティ論で展開することになる。コミュニティ形成を担う個人の「コミュニティ意識」を捉える方法として知られているのが奥田道大の「コミュニティ・モデル(通称:奥田モデル)」や鈴木広「コミュニティ・モラル」および「コミュニティ・ノルム」である。

奥田モデルは「主体的—客体」という行動の軸と「普遍的—特殊的」という意識の軸をクロスさせることで「地域共同体」「伝統型アノミー」「個我」「コミュニティ」という4モデルを提示し、個人のコミュニティへの態度を問う。「コミュニティ・モラル」は、「Integration(統合・関与)」「Attachment(愛着・満足)」「Commitment(関心・参加)」の3因子によってコミュニティ意識を量的に測定するものである⁹。また、これと対になってコミュニティの規

⁹ 金子勇による修正モデル(金子、2011)。

表2 「コミュニティ意識」の新たな分析枠組み

① 「認識」レベル＝「コミュニティ・コグニッション」(＝「コミュニティ認識」) 「格差－平準」と「開放－閉鎖」
② 「感情」レベル＝「コミュニティ・アタッチメント」(＝「コミュニティ帰属感」) 「われわれ感情」、一体感、郷土愛
③ 「行為」レベル＝「コミュニティ・コミットメント」(＝役割「意識」) 行事参加、役職就任、地域貢献
④ 「アイデンティティ」レベル＝「コミュニティ・アイデンティティ」 (＝「コミュニティ」における自他の「関係」意識) 「依存感情」(マッキンヴェアー)、自他の関係における社会自我「意識」

(出典 船津、2014 145)

範意識を測定するのが「コミュニティ・ノルム」であり、これは「主体主義－客体主義」「特殊主義－普遍主義」「格差肯定－平準志向」の3要素から成る。これらを用いることにより、鈴木らは都市化・産業化にともなうコミュニティの状態を「成員構成の変化」「意識形態」「社会構造の変化」「充足水準の変化」の4つの変数間の関係で分析した(鈴木、前掲書)。

これらを踏まえつつ、船津衛はマッキンヴェアーの「コミュニティ感情」の3要素を基礎におき、「コミュニティ意識」の新たな分析枠組みを提示している(船津、2014 145)。これは「コミュニティ・モラル」と「コミュニティ・ノルム」がその射程に収める「認識」「感情」「行為」のレベルに加え、より内面的・潜在的な「アイデンティティ」レベルを捉えることを意図した試みである(表2)。

現在のところ、これにもとづく尺度の開発はなされていないが、個人とコミュニティの関係をより深層的に捉えようとしている点で、この枠組みはコミュニティリアニズム的な人間観・社会観と接続可能であると考えられる。以上のことから、コミュニティを個人の意識から把握する基本的な視座を得たが、それを踏まえて次節で富岡製糸場に対する市民の意識と行動に関する調査データを検討する。

4. コミュニティと世界遺産の関係

ここでは調査データから富岡市というコミュニティに対する市民の意識を検討する。これまで見てきたように、富岡製糸場は富岡市の歴史とともに歩んできた。ただしそれを踏まえたとしても、筆者が冒頭で指摘したように製糸場を富岡市の広い市域におけるコミュニティの紐帯とみなすことは難しい。とはいえ、近年になって「コミュニティの中心」として位置づけられるようになった富岡製糸場が市民の共通関心の1つであることは間違いない。問題はそれが、どの程度の深さで個人の人に関わっているかという点である。コミュニティアニズムがいう「負荷」として富岡製糸場の価値はどこまで個人の人々のアイデンティティに埋め込まれているのか。調査データから検討する。

ここで用いるデータは高崎商科大学が2014（平成26）年に実施した「富岡製糸場の世界遺産登録に関する市民意識調査」¹⁰によるものである（木下編、2016）。前掲の船津（2014）による分析枠組みを用いるが、紙幅の関係から「認識」レベルと「感情」レベルの一部の変数のみを取り出して検討する。なお、調査はランダムサンプリングによって得られたものだが、本稿で扱うデータはあくまでもサンプルに対する記述統計である。以下では、統計分析に先立ち、単純集計とクロス集計から全体的な傾向を捉えることとする。

4-1 「認識レベル」

まずは富岡製糸場への認識のレベルから見ていこう。

表3は、「あなたは富岡製糸場についてどのようにお考えですか」という質問への回答である。本来は5段階の尺度であったが¹¹、「思う」と「思わない」

¹⁰ この調査は、高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センターが富岡市役所と連携して文部科学省「地（知）の拠点」整備事業の一環として2014（平成26年）11月に実施したものである。住民基本台帳から20歳以上の市民2,000人を無作為抽出し、郵送調査にて実施。936票回収した（回収率46.8%）。筆者は当時高崎商科大学教員として本調査の企画・設計および実施・分析に携わった。なお、調査の全体像と集計結果は木下編（2016）に詳しい。

表3 富岡製糸場についての認識

	思う	どちらとも いえない	思わない
富岡市のシンボルである (n=920)	70.5%	18.6%	10.7%
国宝にふさわしいものである (n=920)	81.2%	13.6%	5.1%
世界遺産にふさわしいものである (n=920)	83.3%	13.0%	3.6%

表4 世界遺産登録の取り組みや経過への関心

	n=936
強い関心をもっていた	20.8%
やや関心をもっていた	49.1%
あまり関心をもっていなかった	25.1%
まったく関心をもっていなかった	4.4%

をそれぞれ合成してセルを縮約している。「思う」に注目すると共同性の紐帯としての「富岡市のシンボル」よりもむしろ、外部的・普遍的な評価による「国宝」「世界遺産」として認められている点が示唆的である。

表4は、「あなたは富岡製糸場の世界遺産登録への取り組みやその経過にどの程度関心をもっていましたか」とたずねた質問への回答である。「強い関心をもっていた」が20.8%、「やや関心をもっていた」(49.1%)を合わせておよそ7割に達する。

表5はこれを縮約して年代別のクロス集計としたものであるが¹²、年齢によって「関心あり」「関心なし」の傾向に差が見られた。このことはかつて地域の日常に溶け込んでいた富岡製糸場が、操業停止後は非日常的な文化財とみなされたり、知識ベースの存在に転化しつつある可能性を示唆している。

表6は同様に居住地別のクロス集計である。市内11の地区を富岡製糸場周辺の中心市街地と自動車でのアクセスが中心郊外に分けて縮約した。データ上は大きな傾向の違いは見受けられない。富岡製糸場周辺の中心市街地であり、

¹¹ 「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階の順序尺度。

¹² 本来は5段階の順序尺度であったものを「関心あり」を「関心なし」として縮約した。

表5 クロス集計表 (年齢×世界遺産登録の取り組みや経過への関心 [縮約])

	関心あり	関心なし
20歳代 (n=67)	52.2%	47.8%
30歳代 (n=93)	62.4%	37.6%
40歳代 (n=145)	67.6%	32.4%
50歳代 (n=184)	71.2%	28.8%
60歳代 (n=245)	68.6%	31.4%
70歳以上 (n=193)	83.9%	16.1%
全体 (n=927)	70.4%	29.6%

表6 クロス集計表 (居住地×世界遺産登録の取り組みや経過への関心 [縮約])

	関心あり	関心なし
中心市街地 (n=358)	71.2%	28.8%
郊外 (n=567)	69.8%	30.2%
全体 (n=925)	70.4%	29.6%

表7 富岡製糸場についての知識

	知っている	知らない
日本の製糸業の技術普及の原点であったこと (n=920)	91.8%	8.2%
明治政府が設置した模範工場であり、産業育成の拠点であったこと (n=909)	86.1%	13.9%
明治期の建造物がほぼ完全な形で残っていること (n=909)	91.5%	8.8%
官営時代に製糸技術を広めるため全国から工女が集められたこと (n=912)	90.2%	9.8%
製糸場の工女たちは、適切な就業規則のもとで働いていたこと (n=913)	76.8%	23.2%
市内のお寺には身寄りのなかった工女たちの墓があること (n=910)	60.0%	40.0%
民間払下げ後も、各地から集まった若い女性が多く働いていたこと (n=913)	68.2%	31.8%
民間払下げ後、昭和62年まで操業していたこと (n=907)	73.9%	26.1%

それ以外の郊外地区となる。

表7は、富岡製糸場についての知識を「あなたは富岡製糸場に関する以下のようなことがらについてご存知ですか」としてたずねたものである。「知っている」に注目すると、「日本の製糸業の技術普及の原点であったこと」という製糸場に固有の知識をもつ回答者の割合が多い。これは富岡市におけるふるさと学習や市が進める「富岡学」などの取り組みを反映していると思われる。

反対に、「知らない」に注目すると、「市内のお寺には身寄りのなかった工女たちの墓があること」が最も多い。また、意外なことに「民間払下げ後も、各地から集まった若い女性が多く働いていたこと」も知られていない。昭和の片倉工業富岡工場として稼働していたころも製糸場には多くの若い女性が勤務していた。製糸場周辺地域の住民たちにとっては出退勤する「片倉の女の子」の姿は日常の光景だったという¹³。とはいえ、製糸場の操業時の様子を直接知らない若い世代や郊外の住民にとっては、そうした情報を知る機会は少ないのかもしれない。今後、より詳細な分析を行う必要がある。

4-2 「感情レベル」

感情レベルでは、世界遺産登録への評価や富岡製糸場に対する愛着をみる指標として、好意的な評価や親しみの有無などを取り上げる。

表8は、世界遺産登録への評価を「あなたは富岡製糸場の世界遺産登録をどのように感じていらっしゃいますか」という質問でたずねたものである。おおむね好意的な評価を示しているとみることができる。表9・10は、それぞれ縮約したクロス表で年代別、居住地域別の評価を示したものである。

表9のクロス集計表は、5段階の尺度であったものを「評価しているかそうでないか」という軸で捉えなおして縮約したものである¹⁴。これをみると「評

¹³ 地域住民聞き取り調査（2014年9月実施）より。

¹⁴ 本来は5段階の順序尺度であったものを「とても良かった」と「良かった」を縮約して「評価あり」とした。同様に「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」を「評価なし」として縮約した。

表8 世界遺産登録への評価

	n = 936
とても良かった	34.0%
良かった	43.8%
どちらともいえない	17.1%
あまり良くない	2.9%
良くない	1.6%

表9 クロス集計表 (年齢×世界遺産登録への評価 [縮約])

	評価あり	評価なし
20歳代 (n=67)	77.6%	22.4%
30歳代 (n=93)	72.0%	28.0%
40歳代 (n=145)	77.2%	22.8%
50歳代 (n=184)	78.8%	21.2%
60歳代 (n=245)	75.5%	24.5%
70歳以上 (n=193)	84.9%	15.1%
全体 (n=926)	78.2%	21.8%

表10 クロス集計表 (居住地×世界遺産登録への評価 [縮約])

	評価あり	評価なし
中心市街地 (n=358)	80.2%	19.8%
郊外 (n=566)	77.0%	23.0%
全体 (n=924)	78.2%	21.8%

「評価あり」の割合が最も高いのは70歳以上だが、全体として大きな差はない。

同様に居住地別の縮約クロス集計表である表10では、中心市街地と郊外でわずかながら傾向の違いが見いだせる。

表11は、製糸場への愛着や製糸場を地域の誇りと感じるかどうかをたずねたものである。本来は5段階の尺度であったが¹⁵、縮約して「思う」と「思わ

¹⁵ 本来は5段階の順序尺度であったものを「そう思う」と「ややそう思う」を縮約して「愛着あり」とした。同様に「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」を「愛着なし」に縮約した。

表 11 富岡製糸場に対する親しみ

	思う	どちらとも いえない	思わない
親しみを感じている (n=915)	88.7%	7.5%	3.7%
子どもたちに親しんでもらいたいものである (n=918)	71.8%	19.6%	8.4%
他の地域の人にも見てもらいたいものである (n=914)	73.7%	17.4%	8.8%

表 12 クロス集計表 (年齢×富岡製糸場に対する親しみ [縮約])

	親しみあり	親しみなし
20 歳代 (n=67)	61.2%	38.8%
30 歳代 (n=93)	59.1%	39.8%
40 歳代 (n=145)	69.0%	30.3%
50 歳代 (n=184)	65.8%	33.7%
60 歳代 (n=245)	69.4%	29.0%
70 歳以上 (n=192)	79.8%	15.5%
全体 (n=915)	44.4%	11.1%

ない」をそれぞれ合成してセルを縮約している。

表 12 は富岡製糸場に対する親しみと先ほど同様の年齢別の縮約クロス集計である。おおむね年齢層が上がるとともに「親しみあり」の割合が高くなっていることがわかる。実際、40 歳代以上の世代は、富岡製糸場が「片倉工業富岡工場」として稼働していた時代を知る人々である。このことから個人とコミュニティの関係における共通の経験、いかえると時間・空間の共有の重要性が示唆される。逆にいえば、富岡製糸場が名実ともに「コミュニティの中心」として人々の共同性を紡ぐ存在になるためには、世代を超えた共通の関心・感情を引き起こすことが必要となることがわかる。

同じく表 13 は、製糸場に「親しみを感じている」と居住地のクロス集計である。

全体を見ると大きな傾向としては中心市街地の方がやや「親しみあり」の回答割合が高くなっている。実は、ここに示していない内訳を見ると郊外の小野

表13 クロス集計表 (居住地×富岡製糸場に対する親しみ [縮約])

	親しみあり	親しみなし
中心市街地 (n=358)	71.7%	28.3%
郊外 (n=566)	69.6%	30.4%
全体 (n=924)	70.4%	29.6%

地区や丹生地区、妙義地区など市街地からの距離が離れると逆に回答割合が低いことが示唆される。空間・距離による個人的な経験の差が、コミュニティ意識の形成に寄与していることが想定される。もちろん、ここには第3の変数としての年齢や製糸場への知識などが影響していることも考えられる。その点については今後の詳細な分析が必要だが、現在も過去も中心市街地の住民にとって富岡製糸場は日常風景の一部として共有されていた。その意味で、中心市街地という領域において富岡製糸場は「コミュニティの中心」足りえるのかもしれない。しかしながら、コミュニティの空間的領域が郊外を含む富岡市全体に拡大した場合、状況は同じではありえない。

今後、統計的推定の手続き等は必要であるものの、ひととまずはこれまでみてきたデータから、近年、富岡市の「コミュニティの中心」とされている富岡製糸場は世界遺産という外部的評価をきっかけに、多くの市民に共通関心として認識されていることが示唆された。また、製糸場の世界遺産登録への評価もすべての市民でおおむね高かった一方、年齢や居住地などで親しみや愛着の対象としての捉え方がことなる様子がうかがえた。

5. 小括

本稿では、世界遺産・富岡製糸場と富岡市のコミュニティについて検討するにあたり、コミュニタリアニズムや R. M. マッキーヴァーのコミュニティ論を手掛かりに、個人とコミュニティの関係把握に向けた考察を行ってきた。そこから個人とコミュニティの関係を「認識」「感情」「行為」「アイデンティティ」から捉えるための準備として、限られたデータを検討した。

あくまでも今後の研究の予備作業として取り組んだものであり、これまで論

じてきたことからあえて仮説的なことを述べてこの小論のしめくりとしたい。

筆者は、冒頭に示したように世界文化遺産として顕著な普遍的価値を認められた富岡製糸場は多くの市民の関心の対象であるものの、これ自体は富岡市という広いコミュニティにおける共同性の紐帯とはなりがたいと考えている。本稿で検討したわずかなデータも、それについて示唆する部分があった。

富岡製糸場が地域の内発的発展によって生まれたものでも、世界遺産となったものでもないという事実も、コミュニティとの関係を考えるうえで重要な要素である。「コミュニティの中心」や核と呼ばれながらも、富岡製糸場は必ずしもコミュニティの伝統・文化が培った共同性にもとづくものであるとは言い難い。

しかしながら、世界遺産登録によって外部から「普遍的」な価値が認められたことは、かえって製糸場を「コミュニティの中心」として外部に開くこととなった。前述のように官民の活動は富岡市というコミュニティにおいて富岡製糸場を中心にして外部に向けられたものになりつつある。例えば、2節で述べたように世界遺産登録前後から富岡市においてはさまざまな方法で地域の歴史・文化と触れる機会が意識的に設けられてきた。富岡製糸場や養蚕・製糸産業に関するイベント開催や、商工会の支援を受けたボランティア団体による「工女さんのまちてくマップ」の作成、NPO 法人富岡製糸場を愛する会による「工女まつり」の開催、フランス祭りの誘致など、市民が交わり、集い、地域の文化に触れる内外の交流の機会が増えつつある。

1つの例を挙げてみよう、近年では富岡製糸場の観光に「工女」の物語が欠かせないものになりつつある。しかし、富岡製糸場で「工女」が働いたのはすでに100年前、明治の官営期の頃のことである。その後、民間の経営の中では「工女」の呼び名が使われることは少なく、「女工さん」「女の子」「片倉の社員さん」など入り混じっていたという¹⁶。しかし、製糸場の世界遺産登録によって明治の記憶と記録に光が当たり、それと共に「工女」も蘇った。正確にいう

¹⁶ 元片倉工業従業員聞き取り調査（2014年9月実施）・地域住民聞き取り調査（2014年9月実施）より。

ならば、富岡製糸場の世界遺産を支えたさまざまな人や組織の手によって、かつての歴史的事実が、世界遺産・富岡製糸場に関わる人たちが共有できる物語として現代に生まれ変わったのである。

岩井市長は自らが目指す「富岡製糸場を核としたまちづくり」の本質を「地元文化に基づくまちづくり」と説明する。具体的には郷土学習を通じて市民が交流し、地域の魅力の掘り起こしと情報発信につなげることで、観光振興につなげ地域に還元する仕組みを描く¹⁷。この手法は地域の歴史や文化を共有することで、コミュニティの共同性の契機となる愛着や誇りを生みだす取り組みである。これはそれまで富岡製糸場との関りがなかった市民たちが、その価値を共有する入口となるアソシエーションの活動である。

アソシエーション論の佐藤慶幸は、マッキーヴァー理論から「コミュニティ感情は、自発性（ボランティアズム）にもとづく人びとの共同生活における心的な相互作用をとおして形成」されることを読み取り、コミュニティの背後にボランティアズムがあることを指摘する（佐藤、1999 153）。コミュニティを土台として、人びとが自発的にアソシエーションに参加し、それらが適切な対話を行うことは、コミュニタリアニズムが要求する共通善の追求プロセスとも重なる。

世界遺産の普遍的価値は新たなコミュニティを形成する共同性やコミュニティ感情を育み、歴史や文化を新たな共通善とするきっかけとなりえる。その意味で、世界遺産・富岡製糸場は富岡市における「コミュニティの中心」となる新たな共同性を帯びつつあるといえる。同時に経験する人や組織の交流、いわゆる公共性にもとづくアソシエーションの活動によって豊かなコミュニティにつながっていく。その意味で、世界遺産の普遍的価値、公共性、共同性のそれぞれの作用をどう捉えることができるのか、興味が尽きない。

本稿では、これまでの研究成果の取り込みと収集したデータの整理に努めたが、理論的にも実証的にも課題は多い。理論面では、コミュニタリアニズムの

¹⁷「富岡製糸場を核としたまちづくり」の本質 岩井 けんたろう のブログ (2018年2月15日取得、<https://ameblo.jp/iwai-kentarou/entry-12227972917.html>)

共通善や美德の概念と、社会学やコミュニティ心理学の概念との比較検討、あるいは橋渡しが必要である。さらに仮説的に提示した世界遺産の普遍的価値がきっかけで、地域において公共性をそなえたアソシエーションの活動が生まれ、新たな共同性を紡ぎだすプロセスは魅力あふれるが、理論的には精緻化が欠かせない。実証研究という面でも都市社会学のコミュニティ論の遺産を継承しつつ、コミュニティ意識、コミュニティの中心、共同性、公共性などの概念間の関連を整理することが必要である。さらに、個人とコミュニティが不可分に結びついたアイデンティティをより深いレベルで把握して分析するためには心理学的な個人の主観的世界に切り込むことになり、コミュニティ心理学の知見を積極的に取り込む必要がある。そうした点を念頭に置きつつ、コミュニティアリズムと実証研究を橋渡しすることで、現実の個人とコミュニティの関係性のあり方や、まちづくりの方法論構築に寄与できる部分があると思われる。

この研究は、平成 27 年度（2015 年度）科学研究費補助金基盤研究（C）「コミュニティアリズムと幸福研究——政治経済学における理論的・実証的展開」（研究代表者 小林正弥）の一環として行ったものである。

（参考文献）

- 新井直樹（2008）「世界遺産と観光まちづくり——世界遺産を目指す『富岡製糸場と絹産業遺産群』の取り組み」『地域政策研究』11（3）：47-64
- 広井良典（2010）「コミュニティとは何か」広井良典・小林正弥編『コミュニティ』勁草書房、11-32
- 船津衛（2014）「コミュニティへの関心・関与——『コミュニティ意識』」船津衛・浅川達人『現代コミュニティとは何か——「現代コミュニティの社会学」入門』恒星社厚生閣、136-145
- 金子勇（2011）『コミュニティの創造的探求——公共社会学の視点』新曜社
- 河井亨（2011）「自己とコミュニティの関係についての社会的考察——G. H. ミードと E. H. エリクソンの再読を通じて」『京都大学大学院教育学研究科紀要』57：641-653

- 小林正弥 (2013) 「マイケル・サンデルとリベラルーコミュにタリアン論争」 菊池理夫・小林正弥編 (2013) 『コミュニタリアニズムの世界』 勁草書房、13-110
- 木下征彦 (2013) 「コミュニティへのアプローチ」 菊池理夫・小林正弥編 (2013) 『コミュニタリアニズムの世界』 勁草書房、161-203
- 木下征彦 (2016) 「富岡地域における観光まちづくりの現状と展望」 『高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター紀要』 2: 85-101
- 木下征彦編 (2016) 『高崎商科大学「地(知)の拠点」整備事業 地域課題研究プロジェクト／地域資源研究プロジェクト 富岡地域研究報告書』 高崎商科大学コミュニティ・パートナーシップ・センター
- MacIver, Robert Morrison (1917) *Community: a sociological study: being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life*, Macmillan (中久郎・松本通晴監訳『コミュニティ—社会学的研究—社会生活の性質と基本法則に関する一試論』 ミネルヴァ書房、2009年)
- MacIver, Robert M. and Page, Charles (1950) *Society An Introductory Analysis*, Macmillan
- 森谷健 (2006) 「旧官営富岡製糸場の世界遺産登録とまちづくりに関する富岡市民意識調査(報告)」 『養蚕・製糸・織物などの歴史遺産を生かした「シルクカントリー群馬」の地域再生構想調査報告書』、25-37
- 毛利和雄 (2008) 『世界遺産と地域再生——問われるまちづくり』 新泉社
- 奥田道大 (1983) 『都市コミュニティの理論』 東京大学出版会
- 大塚昌利 (2000) 「富岡市における「中心性」の変容と移動」 『立正大学文学部論叢』 111: 1-20
- Plant, Raymond (1974) *Community and Ideology: An Essay in Applied Social Philosophy*, Routledge & Kegan Paul. (中久郎・松本通晴訳『コミュニティの思想』 世界思想社、1979年)
- Sandel, Michael ([1982]1998) *Liberalism and the Limits of Justice*, ED2, Cambridge University Press (菊池理夫訳『リベラリズムと正義の限界 原著第2版』 勁草書房 2009年)
- Sandel, Michael (1996) *Democracy's Discontent: America in Search of a Public Philosophy*, Harvard University Press (金原恭子・小林正弥監訳・千葉大学公共哲学センター訳『民主政の不满—公共哲学を求めるアメリカ 手続き的共和国の憲法』 勁草書房、2011年)

佐藤慶幸（1999）『現代社会学講義』有斐閣

鈴木広（1978）『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』アカデミア出版会

富岡製糸場世界遺産伝道師協会編（2011）『富岡製糸場事典』上毛新聞社

富岡のまち編さん委員会編（2012）『富岡のまち』富岡市教育委員会

（きのした ゆきひこ）